

I 2016年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2016年度大学評価結果総評】

スポーツ研究センターでは教育・研究活動の一環として、2016年2月に市ヶ谷キャンパスのスカイホールで開催された公開講座「オリンピックとメディア」が学内外から多くの参加者を集め、スポーツ健康学分野に対する社会的な関心の高さを証明した。多くの所員の研究活動の成果は、論文や学会報告として対外的に公表され、また、その成果は社会的に評価されたものも多いことは高く評価される。また、これら研究活動を支える、科研費等の外部資金も獲得されている。ただ、組織評価に関しては、所員による自己点検・評価にとどまっていると思われ、他学部有識者や学外有識者による第三者評価組織を設置して、活動に関する客観的評価を受けることが、スポーツ研究センターの今後のさらなる発展につながるものと考えられる。

スポーツ研究センターのホームページが2015年10月6日を最後に更新がされておらず、兼担所員の一覧も2015年度のままとなっていたが2016年7月末までに当該ホームページの更新が予定され対応が見込まれる。ホームページは重要な対外的広報ツールであり、刷新も含め定期的な更新を行うよう改善が見込まれる。

【2016年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400字程度まで）

昨年度の評価において「他学部有識者や学外有識者による第三者評価組織を設置して、活動に関する客観的評価を受けることが、スポーツ研究センターの今後のさらなる発展につながる」とのコメントを受けた。これに対し、研究活動に関しては昨年度より研究倫理委員会を設置し、そのメンバーには本研究所員のみならず、他学部の有識者を含めて構成し、研究計画に対する客観的評価を受けるようにした。またホームページの更新に関しては、2016年7月に更新を行った。今後は専任研究員により、従来よりも頻繁に更新できるように努めたい。

【2016年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

2016年度の大学評価で「他学部有識者や学外有識者による第三者評価組織を設置して、活動に関する客観的評価を受けることが、スポーツ研究センターの今後のさらなる発展につながる」との指摘に対して、2016年度より研究倫理委員会を設置し、他学部の有識者を含めて構成し、研究計画に対する客観的評価を受けるように対応した。またホームページの更新に関しても、2016年7月に更新を行い適切に対応した。今後は、ホームページの更新方式を組織的に明示し、内容のより一層の充実を期待する。

II 自己点検・評価

1 内部質保証

(1) 点検・評価項目における2016年度の現状

1.1 内部質保証システム（質保証委員会等）を適切に機能させているか。

①質保証活動に関する各種委員会は適切に活動していますか。	はい いいえ
------------------------------	--------

【2016年度における質保証活動に関する各種委員会の構成、活動概要等】※箇条書きで記入。

2015年度より、内規により原則として前所長が内部質保証委員を担当している。
年間3回程度開催される運営委員会と全所員間のメール審議を通じ、全所員が参画して自己点検評価を行っている。

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における2015年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・2015年度より、内部質保証委員を内規により制定した。	

【この基準の大学評価】

※上記(1)～(2)の記載内容に基づき基準全体の評価を記入。

スポーツ研究センターでは年3回程度開催されている運営委員会と、メール審議を利用した全所員参加による自己点検・評価活動の実施、内部質保証委員会の内規制定、前所長の内部質保証委員担当など、内部質保証活動が始められたことは評価できる。今後は、内部質保証委員会の組織、機能、活動方針などを明文化するなど明確にし、自己点検活動との綿密な連携を中心に内部質保証活動の整備強化を図ることを期待する。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

2 研究活動

【2017年5月時点における点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

2.1 研究所の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。
2016年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。
①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）
※2016年度に実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を箇条書きで記入。 ・2017年3月13日（月）市ヶ谷キャンパスに於いて、プロジェクト報告会を実施した。各プロジェクトの報告および質疑応答を実施した。プロジェクトの内容については以下のようにになっている。 ① 2016年度法政大学新入生対象体力テスト結果報告 ② 法政大学硬式野球部所属選手を対象としたコンディショニングに関する研究 ③ 大学スポーツの大学ブランディングに対する影響 ④ 大学スポーツと大学の地域における評価との関係について ⑤ アスリートとアスリート・アントラージュが考えるスポーツパーソンシップ
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし
②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）
※2016年度に刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を箇条書きで記入。 ○出版物 1. 書籍 ・放送席から見たサッカー日本代表の進化論，祥伝社（2016年4月） ・アスリートの心理学，日本文化出版（2016年5月） ・岡崎慎司 身体覚醒メソッド，学研プラス（2016年10月） ・科学する野球 ピッチング&フィールディング，ベースボール・マガジン社（2016年10月） ・科学する野球 バッティング&ベースランニング，ベースボール・マガジン社（2016年12月） ・スポーツメンタルトレーニング教本 三訂版，大修館書店：163-P.167（2016年12月） ・よくわかるスポーツ倫理学，ミネルヴァ書房：178-179（2017年3月） 2. 論文 ・Perception of Japanese collegiate athletes about the factors related to mentoring support. Journal of Physical Education Research 3(4): 12-24, 2016. ・障がいを持つトップアスリートの心理的競技能力と心理的 well-being の関連. アダプテッド・スポーツ科学 14: 25-32, 2016. ・大学生アーチェリー選手のパフォーマンス向上へのアクセプタンス&コミットメントセラピーの適用事例. 行動療法研究 42: 413-423, 2016. ・受傷アスリートとそのチームメイトが持つ認識の明確化. スポーツ産業学研究 27: 37-47, 2016. ・スポーツパフォーマンス向上のためのアクセプタンスおよびマインドフルネスに基づいた介入研究のシステムティックレビュー. 行動療法研究 43: 61-69, 2016. ・Characteristics of Japanese collegiate athletes with motivation and feasibility for coaching in junior high and high school extracurricular sports activities. International Journal of Coaching Science 10: 115-126, 2016. ・Cooperative coaching: Benefits to students in extracurricular school sports. Journal of Physical Education and Sport 16: 806-815, 2016. ・Relative Age Effect on Psychological Factors Related to Sports Participation among Japanese Elementary School Children. Springer International Publishing・Advances in Human Factors in Sports and Outdoor Recreation: 199-211, 2016.

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

- ・高速度スパイクに対するディグ方法の提案. スポーツパフォーマンス研究 8: 335-342, 2016.
- ・エゴグラムを用いたアスリート理解と心理支援. 交流分析研究 41(2): 64-70, 2016.
- ・指導者のリーダーシップの在り方が選手の社会的スキルに及ぼす影響—中学校野球部員を対象とした競技レベルとの関係性—. 法政大学スポーツ研究センター紀要 35: 33-38, 2016.
- ・Differences in post-exercise T2 relaxation time changes between eccentric and concentric contractions of the elbow flexors. European Journal of Applied Physiology 116: 2145-2154, 2016
- ・Muscle plasticity related to changes in tubulin and α B-crystallin levels induced by eccentric contraction in rat skeletal muscles. Physiology International 103: 300-309, 2016.
- ・Eicosapentaenoic and docosahexaenoic acids-rich fish oil supplementation attenuates strength loss and limited joint range of motion after eccentric contractions: a randomized, double-blind, placebo-controlled, parallel-group trial. European Journal of Applied Physiology 116: 1179-1188, 2016.
- ・Increases in M-wave latency of biceps brachii after elbow flexor eccentric contractions in women. European Journal of Applied Physiology 116: 939-946, 2016.
- ・日本人一流競技選手における形態および身体組成の競技種目特性. トレーニング科学 27(1): 35-46, 2016.
- ・スポーツ現場におけるあはき師の役割. 東洋療法学校協会学会誌 40: 13-18, 2016.
- ・米国におけるスポーツ鍼灸の実践 : Boise State Universityでの鍼治療を中心に(1). Training journal 38(3): 42-45, 2016.
- ・米国におけるスポーツ鍼灸の実践 : Boise State Universityでの鍼治療を中心に(2). Training journal 38(4): 42-45, 2016.
- ・米国におけるスポーツ鍼灸の実践 : Boise State Universityでの鍼治療を中心に(3). Training journal 38(5): 44-49, 2016.
- ・The Relationship between Perceived Social Media Marketing Activities of J. League Clubs and Behavioral Intention of Spectators. Asian Sport Management Review 11, 2016.
- ・フィギュアスケート観戦のプロダクト構造 : 競技的要素に着目して. スポーツマネジメント研究 8(1), 2016.
- ・Prolonged sitting-induced leg endothelial dysfunction is prevented by fidgeting. American Journal Physiology - Heart and Circulatory Physiology 311: 177-182, 2016.
- ・スポーツ演習の授業プログラムと受講生の社会的スキルの関連. 法政大学スポーツ研究センター紀要 35: 1-5, 2017.
- ・指導スタイルとパーソナリティ, 社会的スキルの関連に関する一考察. 法政大学スポーツ研究センター紀要 35: 7-10, 2017.
- ・高校運動部員用礼儀マナー尺度の開発. 法政大学スポーツ研究センター紀要 35: 15-25, 2017.
- ・スポーツ競技者における二分法的思考と心理的健康, 成長感との関連. 法政大学スポーツ研究センター紀要 35: 27-32, 2017.
- ・陸上競技短距離選手にける早朝練習が午後からの練習に与える影響. 法政大学スポーツ研究センター紀要 35: 39-47, 2017.
- ・体力および健康に対する主観的評価がスポーツ実施行動に与える影響. 法政大学スポーツ研究センター紀要 35: 49-57, 2017.
- ・指導者の言葉がけがパフォーマンスに及ぼす影響 : 成績低下が著しい種目を対象に. 法政大学スポーツ研究センター紀要 : 35, 59-68, 2017.
- ・日本人及びフィリピン人若年女性におけるボディ・イメージと自意識の関連の比較. 法政大学スポーツ研究センター紀要 : 35, 69-77, 2017.
- ・ダンス学習における即興表現の可能性 -小学校体育科における「表現運動」の授業実践-. 法政大学スポーツ研究センター紀要 35: 85-87, 2017.
- ・学生における体育会活動に対する意識調査. 法政大学スポーツ研究センター紀要 35: 95-102, 2017.
- ・本学学生の諸年次における体格・体力について. 法政大学スポーツ研究センター紀要 35: 103-122, 2017.
- ・法政大学小金井キャンパスの学生の身体的特徴および体力について-学年・学科別の検討(2015年度)-. 小金井論集 (印刷中)
- ・教育実習「事前指導と事後指導」を組み合わせた相互参加型演習の効果と課題—実習経験者と未経験者の「学び合い」に着目して—. 法政大学スポーツ健康学研究第8号 (印刷中)
- ・Prior exercise and standing as strategies to circumvent sitting-induced leg endothelial dysfunction.

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

3. その他（研究報告, DVD 等）

- ・静岡新聞社（朝刊）時評.（2016年6月、7月、8月、9月、11月、1月、3月）
- ・アスリートの心の強化法 指導者・選手のためのメンタルトレーニングの理論と方法（DVD全4巻）. ティアンドエイチ株式会社（2016年11月）

○学会発表等

1. 学会発表

- ・スポーツにおける M-Test の有用性に関する検討 高校ハンドボール選手を対象とした検討. 第 65 回全日本鍼灸学会学術大会（2016年5月）
- ・はり師・きゅう師養成校に在籍する学生への意識調査 スポーツトレーナーに対する意識について. 第 65 回全日本鍼灸学会学術大会（2016年5月）
- ・鍼灸治療に用いる機能的な動作の評価方法. 第 65 回全日本鍼灸学会学術大会（2016年5月）
- ・Impact of order of exercises on substrate oxidation in healthy men. 63rd Annual Meeting of American College of Sports Medicine.（2016年6月）
- ・エイコサペンタエン酸は伸張性収縮に伴う筋・関節機能低下および筋痛を抑制する. 日本運動・スポーツ科学学会第 23 回大会（2016年7月）
- ・肘関節屈曲による伸張性収縮が骨格筋の活性パターンおよび損傷に及ぼす影響. 日本運動・スポーツ科学学会第 23 回大会（2016年7月）
- ・The Effect of Team Unity on Resilience of Athletes. 国際心理学会・第 31 回大会（2016年7月）
- ・Muscle activity of lower extremities and the trunk while doing squats with ViPR. European College of Sports Science, Vienna.（2016年7月）
- ・異なる関節角速度における繰り返しの伸張性収縮が筋および支配神経の機能・構造へ与える影響. 第 2 回日本筋学会学術集会（2016年8月）
- ・局所的な骨格筋の巧緻性が全身動作の巧緻性に及ぼす影響および運経験と関連. 第 64 回日本教育医学会大会（2016年8月）
- ・チームメンバーの属性はメンタルヘルス改善のプロセスに影響を及ぼすのか -競技種目と性別の違いによる検討-. 日本体育学会・第 65 回大会（2016年8月）
- ・スポーツ演習の授業プログラムが受講生の社会的スキル向上に及ぼす影響に関する一考察. 日本体育学会第 67 回大会（2016年8月）
- ・身体表現の教育と人間形成に関する研究（4）. 日本体育学会・第 67 回大会（2016年8月）
- ・運動の実施順序の相違が基質酸化に及ぼす影響. 第 71 回日本体力医学会大会（2016年9月）
- ・小学校のダンス学習における「即興表現」のあり方に関する一考察. 日本スポーツ教育学会・第 36 回大会（2016年10月）
- ・Does the muscle output of an antagonist improve by inserting needles in an agonist? International Conference of World Federation of Acupuncture-Moxibustion Societies Tokyo/Tsukuba 2016（2016年11月）
- ・指導スタイルとパーソナリティ, 社会的スキルの関連 -ジュニアラグビー選手を対象とした予備調査結果-. 日本スポーツ心理学会第 43 回大会（2016年11月）
- ・ギャンブルを行うアスリートはメンタルが強いのか? 日本スポーツ心理学会 43 回大会（2016年11月）
- ・今後求められる学生野球の姿とは? 日本野球科学研究会第 4 回大会（2016年12月）
- ・高校運動部員用礼儀マナー尺度の開発. 九州スポーツ心理学会第 30 回大会（2017年3月）
- ・Differences of MRI T2 Activation Pattern and Damage in Elbow Flexor Muscles After Eccentric Contractions. 5th International Congress on Magnetic Resonance Imaging（2017年3月）
- ・強度を自己選択した有酸素性運動中の生理学的および心理学的指標の変化 -若齢者と中高齢者との比較-. 日本体育測定評価学会第 16 回大会（2017年3月）
- ・選択課題を複合した上肢の調整力テストの試作と選択反応時間との関係. 日本体育測定評価学会第 16 回大会（2017年3月）
- ・福祉作業所におけるダンス活動の意味-20 年を超えるダンスクラブのとりくみから-. 日本養生学会・第 18 回大会（2017年3月）

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

2. 講演

- ・合理がメダルを引き寄せる, 理工・建築環境学会 (2016年11月)
- ・トレーニングと傷害の境, 第39回東海スポーツ傷害研究会 (2017年2月)

3. その他 (放送出演, コラム等)

- ・バーベルを上げるために, 日本放送協会ラジオ第一放送 (2016年5月)
- ・ロシアドーピング問題を受けて, NHK国際放送 (2016年7月)
- ・波乱の中のリオ五輪, 日本放送協会ラジオ第一放送 (2016年7月)
- ・新たなクライテリアの構築が日本のスポーツを大きく変える, Sports Japan, 文化出版 (2016年7月、8月)
- ・アベマプライム, テレビ朝日 (2016年8月)
- ・チェックイレブン, 日本放送協会 (2016年8月)
- ・視点・論点: リオ大会を終えて (2016年8月)
- ・リオオリンピックを振り返って, BCC (山陰放送) ラジオ「特盛りブンショウドン」 (2016年8月)
- ・リオ五輪を振り返って, 月刊「W i l l」11月号/ワック出版 (248-267) (2016年8月)
- ・リオパラリンピックの今, 日本放送協会ラジオ第一放送: マイあさラジオ (2016年9月)
- ・陸上競技日本三段跳史, 公益財団法人日本陸上競技連盟 創立100周年記念誌 (2016年10月)
- ・新・週刊フジテレビ批評, フジテレビジョン (2016年10月)
- ・オリンピック競技会場 整備費用見直し, 日本放送協会 (2016年10月)
- ・卓球界の育成戦略, 日本放送協会ラジオ第一放送: マイあさラジオ (2016年11月)
- ・競技施設見直しに方向性, 日本放送協会NHKニュース7 (2016年11月)
- ・スポーツ歴史の検証~次世代の架け橋となる人びと~, 公益財団法人 笹川スポーツ財団 (2017年3月)
- ・スポーツの力を考える, 月刊「みんなのスポーツ」平成29年8・9月号

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

③研究成果に対する社会的評価 (書評・論文等)

※研究所のこれまでに発行した刊行物に対して 2016 年度に書かれた書評 (刊行物名、件数等) や 2016 年度に引用された論文 (論文タイトル、件数等) の詳細を簡条書きで記入。

- ・引用論文: 2 件

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

④研究所 (センター) に対する外部からの組織評価 (第三者評価等)

(~400 字程度まで) ※2016 年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。

各所員が個々で学会に所属して精力的に研究活動を行っており、学術論文や学会発表への評価を通じ、本センターに対する客観的な評価も高まっていると推察している。また、本センター運営委員会と全所員参加のメール審議を通じてセンターの活動に対する自己点検評価を行うことにより、包括的・多角的な意見を踏まえた組織運営に勤しんでいる。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況

※2016 年度中に応募した科研費等外部資金 (外部資金の名称、件数等) および 2016 年度中に採択を受けた科研費等外部資金 (外部資金の名称、件数、金額等) を簡条書きで記入。

「2016 年度中に応募した科研費等外部資金」

- ・2017 (平成 28) 年度科研費: 7 件

「2016 年度中に採択を受けた科研費等外部資金」

- ・2016 (平成 28) 年度科研費 0 件

- ・科研費継続課題: 4 件

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における2016年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・「HOSEI2030 アクションプラン」におけるブランディング推進の一つとして挙げられている体育会の強化に寄与するため、本年5月1日付けで専任研究員を採用し、今後の体育会強化におけるコーディネーターの役割を担ってもらい、また体育会強化のプロセスを通じてスポーツ科学に関する研究も遂行してもらい、論文作成および学会発表など、外部への実績発信も積極的に行ってもらおう。	

(3) 現状の課題・今後の対応等 (任意項目)

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

特になし

【この基準の大学評価】

2016年度の研究・教育活動実績については、スポーツ研究センターにふさわしい5つのプロジェクトを進めている。対外的に発表した研究成果については、出版物(書籍・論文等)、学会発表、講演や放送出演など、多数の研究成果がある。しかし、著者の情報が記載されていないので、今後記載することが望まれる。研究成果に対する社会的評価は、引用論文2件という事実のみが報告されているだけであり、今後は具体的な記載をお願いしたい。外部からの組織評価(第三者評価等)は推察にとどまっており、今後の外部評価の可能性について検討を期待したい。科研費等外部資金の応募・獲得状況については、7件の応募を試みたが、伸び悩みが見られる。継続課題の4件の今後も含め、今後の外部資金の獲得方法を十分に検討することが望まれる。
--

III 2016年度における現状の課題等に対する取り組み状況

【2016年度における現状の課題等に対する取り組み状況の評価】

該当なし

【大学評価総評】

スポーツ研究センターはスポーツ科学に関する調査・研究、スポーツ施設を利用した実践活動のために設立された研究センターの使命として、多くの書籍・論文や学会発表・放送出演があることは高く評価される。しかし記載された情報には、著者名や発表者名等の情報が無いため、今後はセンターのどの所員の研究活動の成果物が明確にすることが望まれる。また外部資金は継続した科研費を4件獲得しているが、今後は、公的資金だけでなく民間研究資金獲得など継続した外部資金獲得の努力を期待したい。また本学のブランディング推進の一環として体育会強化に寄与するため、積極的な情報提供・科学的サポートの支援など、今後の具体的な成果に期待する。この際には、スポーツ・サイエンス・インスティテュート(SSI)の教育・研究に対する連携強化も視野に入れた取り組みも必要である。さらに、2015年10月にスポーツ庁が設立され、国としてのスポーツ振興策が強化された。そのような情勢を積極的にとらえて、国のスポーツ政策との協力をも視野に入れることを期待したい。また研究センターとしては、今まで以上に、地域に密着した社会貢献活動などの活性化の実現にも期待したい。また内部質保証委員会の組織、機能、活動方針などをより明確にし、今後の内部質保証活動の整備強化を図ることを期待したい。
--

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。